常光寺々報

2021.5

永代経法要

五月二十三日（日）

朝十時半～十二時

昼一時半～三時

鎌倉組　来恩寺住職

講師　橋本　正信　先生

朝と昼の二席のお勤めですが、同じテーマでご法話をしてくださるようお願いしてあります。どちらにでもお参りください。

空気循環のため、本堂は扉を開けて、換気をしています。気候に合った装いでお参りください。

お経本とお念珠をお持ちください。

マスクの着用もお願いいたします。

横須賀市は範囲外ではありますが緊急事態宣言が発出されました。こうなることを恐れて寺報の発送を控えておりましたが、隣接県でありますし、例年より二週間遅れで、宣言明けとなるであろう二十三日に二年ぶりの永代経法要をお勤めさせていただきます。

今年は無事にお勤めできることを願っています。

ご講師の橋本先生は、以前にもご出講いただいたことのある茅ケ崎のお寺の住職で、若い頃はハワイの開教使をお勤めになり、帰国後に一代でお寺を建立されたバイタリティ溢れる先生です。現在は鎌倉組の組長をお勤めでもあります。

この度の永代経法要のご縁も、不思議のご縁といただいてまいりましょう。どうぞ、お参りください。

番犬　論

お寺には番犬のロンがいます。朝夕に本堂から聞こえるお経の声を耳にしながら十三年が過ぎました。

五百年ほど昔、赤尾の道宗さんのお寺の周りには猿が住んでいたそうです。朝夕にお参りをされる道宗さんの姿を猿は何年も見ておりました。

ある時、誰もいないはずの仏間から磬（きん）の音が聞こえることを不審に思いのぞいてみると、猿が道宗さんの真似をして、お仏壇の前に座り磬を叩いていたそうです。共にいた御同行は悪戯として咎めようとしましたが、道宗さんは「猿もお念仏を喜んでいる」と喜ばれたと伝えられます。

我が家のロンもそろそろ磬を叩き始めるかもしれません。私も猿に負けずにお念仏を喜ぶ身にならせていただきたいものです。

和顔愛語

（本願寺新報「和顔愛語」より抜粋）

他者に接するときには、穏やかな表情で接し、つねに優しい言葉をかける生き方。

とても尊い生き方ですが、私たち凡夫において、これを完全に実行することは不可能ではないでしょうか。落ち込んでいるときや面白くないときには、不機嫌で無愛想な態度になりますし、腹が立ったり、イライラしたときには、人を傷つける言葉を投げかけてしまいます。また、優しい丁寧な言葉のようでも、打算にもとづいた二枚舌やおべんちゃら、その場を取り繕う嘘であったりと、不実な心が表れたものに過ぎず、裏表があるのが私たちです。

しかし逆に、考えてみてほしいことがあります。イヤなことをされたら「この野郎」と拳が上がり、不愉快なものは毛嫌いして払いのけようとする私の手が、仏さまの前ではなぜか自ずと合わされるのです。また人の悪口を言うのが楽しく、愚痴ばかりこぼしている私の口から、「南無阿弥陀仏」とお念仏が出てくるのです。あるいは、困っている人を見かけたとき、打算とかではなく自然に優しい言葉がかけられることさえあるのも事実です。

これは、どこから来ているのでしょう。私の不実な思いからはありえない話で、ひとえに、仏さまのお育てによるとしか考えられません。

❖　❖　❖　❖

しかし同時に、私たちは「煩悩成就」の身でもありますから、次々と煩悩が湧き起こってきて、さっきまで機嫌が良かったのに急に怒り出したということもしばしばです。そのため「不断光」として、「断えず」治療薬を施してくださるわけです。このような光に出遇うからこそ、不実な私の心が柔らかな心となり、穏やかな表情や心からの優しい言葉(和顔愛語)が生まれるのです。すなわち、「和顔愛語」の出所は、不実な私の側から出てくるのではなく、仏さまの側からのお育てによって起こるということであり、この点が、浄土真宗として「和顔愛語」を語る上で、特に注意しておかねばならないことだと思います。

くりすあきら君という少年の詩に

ありがとうは、
しあわせの
あいさつです
（『ありがとうのてがみ』
くりすあきら著）

という一節がありました。

「ありがとう」と言われたら、とても幸せな気持ちになれますし、「ありがとう」と言えるのは、その人が幸せだからと言えるでしょう。

「和顔愛語」も、「幸せの挨拶」だと思います。穏やかな表情や優しい言葉で接してくれたら幸せな気持ちになれます。そして、穏やかな表情や優しい言葉が掛けられるのも、その人がそういう身に育てられた幸せの証しです。「自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現」に向けて、「幸せの挨拶」として、「和顔愛語」を実践していきましょう。

満井秀城　著